

青海省チベット族村社会の寺院と村の関係及び宗教儀礼 —同仁県シュンボンシ村とチュルマ村の事例から—

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
ガザンジェ (尕藏杰)

要旨

本論は青海省チベット族の村社会を研究対象とし、村社会における寺院の教育制度、僧侶の生活、宗教儀礼及び村の宗教組織や年間宗教儀礼などを記述することにより、寺院が村社会に於いてどんな役割を果たしているかを探求するものである。

本論で記述するように、青海省のチベット族は仏教の信者であり、村人は春と夏に出稼ぎに行く以外、年間を通して村の年間儀礼に参加し、家族の健康、家畜の増加などのために祈祷、或いは宗教儀礼を行っている。それ故、チベット仏教の宗教儀礼は彼らの日常生活で重要である。

寺院には近代的な教育機構によく似た学級、及びゲルシェ（博士）資格を設置しているので、僧侶は昔から村社会の知識人であり、宗教儀礼の重要な担当者でもある。中華人民共和国のチベット解放、或いは1958年の民主改革まで、寺院は青海省チベット族村社会の政治・経済・文化・教育などの中心であった。しかし、民主改革により寺院が持っていた村人に対する政治的な影響力が無くなったが、老人ホームや孤児院、教育機構、貧困な家族への金の貸し出し、さらには集落間の草原紛争の調停などの役割は今日でも依然として無視できないほど大きなものである。

本論文では、調査地域の寺院と村の関係や宗教儀礼などを記述することによって、村人の宗教、或いは神に対する認識を検討し、チベット族村社会における人々の精神的な面の特徴を浮き彫りにすることが目的である。

キーワード

チベット仏教、ゲルク派、ニンマ派、世俗僧、山神

Religious Ritual and Relationship of the Village with the Temples in Qinghai Tivetan Village Society

GA zangjie

Abstract

This paper as a subject or research studies the village society of the Qinghai Tibetans. By describing the educational system of the temples in the village society, life of the monks, annual religious rituals and religious organizations of the village, this paper explores what role the temples play in the village society.

As it is described in this paper, Tibetans of Qinghai are Buddhist believers. Villagers except for going to work in spring and summer, they participate in the annual rituals of the village during

the year, and pray for the family health, increase in the livestock, or just participate in religious rituals. Therefore, religious rituals of the Tibetan Buddhism, plays an important role in their daily lives.

In the temples, classes are very similar to the modern education system, and Gerushe Ph.D. qualification was also installed. Since ancient times monks are considered to be intellectuals among the villagers and are important persons responsible for the religious rituals. By Tibet liberation from People's Republic of China, or until the democratic reforms in 1958, temples were in the center for the political, economical, cultural and educational system of the village society of Qinghai Tibetan. However, according to the democratic reforms, the political influence that temples had on the villages was lost. But as before, temples are still play a big role in lending money for the aged and orphans homes, educational systems, families in poverty, and also mediation to the land disputes among the community and etc., and their huge role cannot be ignored.

In this paper, according to the field research of the temples and the relation between the villagers with the religious rituals, the religion of villagers or the recognition of God were investigated. The purpose of this paper is to highlight the spiritual aspects of people in the Tibetan village society.

Keywords

チベット仏教, ゲルク派, ニンマ派, 世俗僧, 山神

I. はじめに

中国在住のチベット族は、ほぼ全員がチベット仏教の信者である。チベット社会はチベット仏教にいろどられている。日常的な生活は程度の濃淡はあれ仏教の戒律に則って営まれる。青海省のチベット族も例外ではない。農牧村の人々は精神的にはもちろん寺院を中心とし僧侶に導かれてさまざまな宗教儀礼を行う。村人は村のマニカン¹ (ma ni khang)² で毎月決まっている日に仏を礼拝し読経をする。彼らの宗教儀礼あるいは祈りの目的はさまざまであるが、基本的に個人の修行が完成することや、農産物の豊作、家畜の増加、家族の幸福、来世はよい生まれ変わりになることなどである。

調査地の宗教儀礼は大まかに四つに分かれる。それは厳格な宗教儀礼を持つチベット仏教のゲルク派やニンマ派の僧侶が行う儀礼、世俗僧³の儀礼、村を集団として行う宗教儀礼、及び村人の各家庭で行う宗教儀礼である。寺院は村人の通過儀

礼或いは、一生の生老病死に緊密につながっている。

このうちゲルク派やニンマ派の僧侶、村集団は、漢族の「農曆(旧暦)」によって毎月定例の儀礼を行う。村人の各家庭では一般に正月の祝い、葬式や病気などの際、僧侶や世俗僧を家へ招いて読経などの宗教儀礼を行う。それゆえ宗教儀礼はチベット族村社会の人々の日常生活の中で不可欠な活動である。

宗教儀礼の重要な担当者である僧侶は伝統的なチベット社会の知識人である。同じ意味で寺院はチベット社会の教育機構でもある。大寺院には現代的な教育機構とよく似た学級を設置し、さらにゲルシェ(博士)の課程もある。民主改革以前は僧侶をめざすものは、5、6歳から寺院に入るのが通例であったが、文化大革命後は小学校、或は中学校卒業後、出家するものもある。

寺院はかつてチベット社会の政治、経済、文化、宗教、教育などの中心であった。それは「解放(1949年の革命)」以前のチベット地域では「政教

合一」制度を行なった。それというのも、寺院の有力な活仏はしばしば統治階級の近親者であり、地方の政治や精神の首領であった。統治階級の親族でない場合でも、それと協力して所属する人々を統治した。

しかし、今日の村社会では寺院や活仏の政治的な影響力は衰弱した。だが、精神的教育的な影響力は依然強いし、依然老人ホームや孤児院、カネ不足のものへの貸出しなど社会福祉機関の役割も果たしている。

II. 調査地域や調査村の概要

調査地域である同仁（レブコン）県は、青海省の東南を占める黄南藏族自治州の東北部に位置し、東は甘粛省のチベット人地域夏河（ラブラン）県と接する。本来牛羊の多頭飼育をとまなう穀物農業を主とする地域である。隆務（ロンウ）鎮には黄南藏族自治州と同仁県の政府があり、州と県の政治、経済及び文化の中心である。

全県の面積は3,275平方キロメートルで、そのうち、耕地面積は7,600ヘクタール、草原面積は30万ヘクタール、森林面積は1.28万ヘクタールである。

海拔は最高4,767メートル、最低2,160メートル、年間平均気温は5.2度、年間平均降水量は425.7ミリメートルという高冷乾燥気候である。

同仁県はチベット族を主とし漢、回、土、サラ族などが住む地域であるが、漢・回はロンウ鎮などの町に集中している。このうち土族はほとんどチベット化している。

シュンボンシ（双朋西）郷は同仁県の東南部にあり、隆務鎮とは33キロ離れている。シュンボンシ郷の海拔は最高3,945メートル、最低2,660メートルである。年間平均気温は3.3度、年間降水量は461.7ミリメートルである。雨季は夏の7月、8月、9月である。

2010年の人口調査によると、シュンボンシ郷の人口は642戸、3,727人であり、その全部がチベット人である。シュンボンシ郷の面積は250.97平方

キロメートルであり、そのうち耕地は669.6ヘクタールで総面積の2.6%を占める。畑はシュンボンシ郷の西北の海拔2,660メートルから3,000メートル間の山地に分布し、主な農産物は、春小麦、裸麦、アブラナ、豌豆である。草地は24,400ヘクタールで総面積の89%を占め、シュンボンシ郷の東南部の海拔3,000メートル以上の高冷地に広がっている。主な家畜は、ヤク、牛、羊、ヤギ、馬、ロバ、ラバなどである。

シュンボンシ郷は、シュンボンシ上部族（zhao'ong dpayis la kha）とシュンボンシ下部族（zhao'ong dpayis）の二つからなり、シュンボンシ上部族は、シェジュウ（協知）村、ニンタ（寧他）村、チュルマ（曲馬爾）村、ガッシュウ（尕秀）村、ホンル（還主）村、コツツェ（阔宰）村、ニヤンジャ（娘加）村、サッソマ（沙索瑪）村など七つの自然村からなる。調査村のチュルマ村はシュンボンシ上部族の一つの自然村である。シュンボンシ下部族はシュンボンシ村ひとつからなっている。

調査村であるチュルマ村の海拔は3,200メートル、郷政府があるシュンボンシ村とは38キロ離れ、さらに県政府と州政府がある隆務鎮とは50キロ離れた山の上の村である。隆務鎮やシュンボンシ郷から直接行くバスがなく、村人達はバイクやトラックでこの間を往復していたが、最近、経済発展で村人の生活は豊かになり、自家用車を持つ家庭もだんだん増えて来た。

チュルマ村は43戸、人口は310人の小さい自然村である（2010年人口調査）。村人は中部ヨーロッパの伝統的混合農業に似た半農半牧生産を行なっている。耕地面積62.3ヘクタール、そのうち約10ヘクタールは休閒・輪作を繰返す、4年一巡の輪作農法である。ヤクと混血牛ゾモを含む牛が326頭、羊が3,430頭である。

シュンボンシ村の海拔は2,660メートル、シュンボンシ郷の一番低いところである。県政府がある隆務鎮とは33キロも離れているが、この村から甘粛省甘南藏族自治州のチベット人地域に通じるバス路線もあり、チュルマ村よりは交通が少し便利である。

シュンボンシ村は245戸からなり、人口は1,395人(2010年の人口調査より)の大きな村である。村人は山地の畑以外に一人当たり0.02ヘクタールの灌漑耕地を持っている。このため農産物の単位面積当たり収穫はチュルマ村より高い。天水に頼るほかない乾燥農業では灌漑ができるか否かが収量を決める。しかし、この村の重要な生業は農耕ではなく牧畜業である。

Ⅲ. 調査村の寺院と僧侶の生活

同仁県はアムド・チベットの伝統的な文化、宗教、習慣、芸術などをよく保存し、その中心とされている。同仁県にはチベット仏教の寺院が40ほどある。そのうち、最大のロンウゴンパ(raong bao dgaon pa)ゴンパは寺院のこと。この場合漢語では隆務僧院)はアムドの六大寺院の一つである。

『青海藏族史』によれば、明清時代からロンウゴンパは同仁県の政治や文化、経済の中心であり、現在も18の末寺があり、600人ほどの僧侶が修行を行っている。寺院の住職であるシャルツン・リンポチュ(夏日倉活仏 Shar tshang)は以前同仁県地域の「政教合一」の首領であった。ロンウゴンパは同仁県の各部族の人々を政治的宗教的に統治し、その盛衰は地域の文化経済の変化に密接に関係していた。繁栄時には2,300人の僧侶が修行していたというが、清朝雍正年間、青海東部を支配したモンゴル親王ロブサンダンチンと清軍の戦いのとき破壊され、さらに1958年の叛乱と文化大革命時に徹底的に破壊された。20世紀末修復、再建できた。

(1) 調査村の寺院

調査村のシュンボンシ村とチュルマ村が属する同仁県シュンボンシ郷には、シゴン(dpayi dgaon), ゲイセイワ(sgar gsar ba), ヤマザシチ(gya'ma bkra shais'khyil), ガルツェゴンパ(mgar rtsai dgaon pa)など四つの寺院がある。このうちガルツェゴンパは本山であり、シゴンと

ヤマザシチは末寺である。ゲイセイワはシゴンの末寺である。したがって四つの寺院の関係は図1のとおりである。

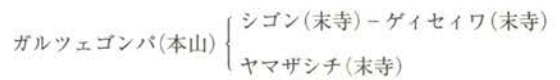


図1 四つの寺院の関係

ガルツェゴンパは今日まで400年の歴史があり、現在168人の僧侶が修行している。この寺院はラブラン大僧院⁴(bla brahmg dgaon pa)を模倣して、聞思学院(仏教理論や哲学)や医学院などの学院を設立し、それぞれ学制やクラスを設置している。寺院は毎年各クラスの修行計画や試験時期、不合格者に対する処罰を決定するなど、かなり厳格な教育を施す。それ故、西寺や新寺、ヤマザシチなどから瓜什則寺に勉強や修行するに來る若い僧侶が多い。

シゴンは200年の歴史があり、現在僧侶が25人いる。僧侶達が毎月宗教儀礼をおこなう以外に、ガルツェゴンパやラブラン僧院などに修行に行く僧侶も近年増えている。ヤマザシチは23人、ゲイセイワも同じくらいの僧侶からなり、約200年までの歴史がある。

この3寺は同仁県では有名な修行地として知られている。それは、有名な修行者、活仏が修行を行った土地だからである。その後、ガルツェゴンパの僧侶や活仏が偉大な修行者を記念するため、村人に記念殿堂などを立てさせ、それがやがて寺院になったのである。

チュルマ村はガルツェゴンパ、シゴン及びゲイセイワの檀家である。シュンボンシ村はヤマザシチとガルツェゴンパの檀家である。シゴンはチュルマ村とは20キロほど離れた山奥にある。シゴンとゲイセイワはシュンボンシ上部族の7カ村の寺であるため、僧侶もシュンボンシ上部族の7カ村の人である。チュルマ村には現在僧侶としてシゴンやガルツェゴンパで修行する村人は10人である。ニンマ派の世俗僧が9人いる。彼らは村で農業や牧業をやりながら、家で宗教儀礼や修行を行っている。葬式や病気の際、村人の要請によっ

て死者や患者のために宗教儀礼を行う場合もある。

シゴンには、ダウカン（'dau khang 経堂。僧侶達が集まって儀礼を行う所）、ゴンカン（mgaon khang 寺の守り神を置く仏殿）、僧房などがある。ダウカンには、釈尊、ゾンカパ（Tsong kha pa チベット仏教改革者、ゲルク派の創造者である）の仏像をはじめ、歴代仏教の有名な学者及びシゴンの活仏の写真、仏像、マンダラなどを飾っている。

シゴンは村とかなり離れた山奥にあり、周囲は山と森に囲まれた修行地である。チベット暦（チベット天文学による暦であり、「農曆」とは異なる）の10日や15日に大勢の信者が黄南藏族自治州のあちこちから礼拝にやって来ている。信者達は、病氣治癒や来世の極楽への転生、家族の幸福を願うなど様々な目的を持って来る。筆者が見た信者は、女性が多く、男性は年寄りとそれに連れられた幼児である。

調査を主に行なったシゴンの組織は他の仏教寺院とそう違いはない。図2に示す（寺院の規模によって組織が異なることもある）。

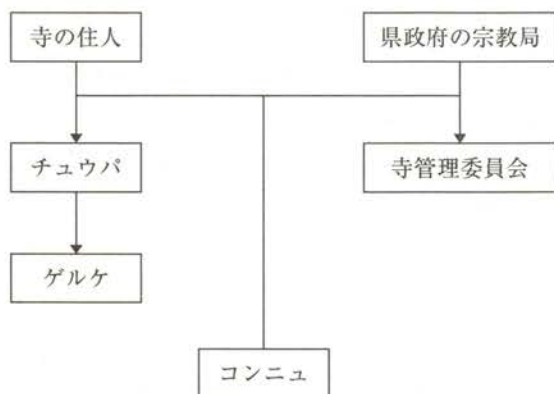


図2 チベット仏教寺院の組織図

一般的に寺院には最高位の活仏すなわちチュウパ（khrai ba）がおり、かれは寺の最高の仏教知識を持つ人であり、寺の儀礼などを主催する僧侶である。また僧侶の規律を監督するゲルケ（dgaeskos）、寺の財政、財産を管理するコンニュ

（dkaong nyer）がいる。

寺院内の寺管理委員会は、文化大革命以後に中央政府が設立し、政治的に寺を管理する組織である。一般的に委員は5人である。この委員会が寺を管理し、政府の宗教に関する政策を伝達する機構である。一般僧侶はチュウパやゲルケの指示により、日常的な宗教儀礼や各学院の授業に出ている。勉強や修行に専心できない僧侶は寺院の修理や掃除、厨房で働かせる。

（2）僧侶の日常生活、生活費

伝統的なチベット社会では、僧侶は知識人であり儀礼を行う人である。したがって寺院は教育機関及び宗教の儀礼を行う場所である。

以下その教育システムについて述べる。チベットの大寺院には近代の教育機構の小学校、中学校、大学、大学院のようにクラスが設置され、ゲルシェ（博士号）の学位も設置されている。最初チベット語からはじめ、文学、医学、仏教などを修行し、40代になってゲルシェになるのが普通である。

チベットの伝統的な教育の学科は、五つの大学科と五つの小学科に分かれる。大学科は工芸学、医学、言語学、因明すなわち論理学、宗教学であり、小学科は修辞学、辞藻学、韻律学、喜劇学、天文学などで、全部で十学科がある。

ここで甘粛省のチベット人地域における唯一のゲルシェの学位を設置している甘粛省南部夏河県のラブラン僧院（bla brang dgaon pa）の教育制度を紹介する必要がある。

ラブラン僧院には聞思学院（thaos bsam glaing）・密教学院・天文学院、医学院など四つの学院があった。聞思学院では仏教の五部大論を主として学習する。学制は20年間である。五部大論のうち因明すなわち論理学は6年間、俱舍論は3年間、中観論2年、戒律3年、般若6年である。五部大論の学習を修了した僧侶は、寺院にゲルシェの学位を申請することができる。申請者は寺院の学者らと弁証法で議論、五部大論を暗唱するなど厳格な試験を受けた後、合格すればゲルシェ

の学位を得ることができる。

しかし、ゲルシェは大学者ではない。ゲルシェは宗教学（仏教）を学び、弁証法のレベルが高いと皆に認められ、仏教の理論的な部分を暗唱することによって取れる学位である。大学者は大学科と小学科を精通している人すなわちバンディタ（サンスクリット語で、五つの学科に精通すること）という。大学者と言う意味である。

上述したようにチベットの寺院では、ゲルシェは大僧院しか設置してないため、ゲルシェを目指すシゴンの僧侶は、現代でも甘粛省のラプラン僧院やラサへ行っている。

例えば、シゴンのある僧侶Aは10年前、ガルツェゴンバやラプラン僧院、ラサの僧院に修行に行った。そして、最終的に、チベットの伝統的な最高の学府であるガンデン大僧院（dga' ldan dgaon pa）のゲルシェになった。彼によると、最初、ガルツェゴンバなどへ修行に行く時、バス代しか持っていなかった。しかし、ガルツェゴンバでは、先生から紹介をうけてその寺院の僧侶になって、村人の布施を寺院の僧侶と同様に受けた。また、寺院の周辺村のある家族と施主の関係を決め、彼は施主である家族の年間儀礼をおこない、そのかわり家族は彼の生活費を保障した。こうした援助があったので、この10年間に修行が予定通り進んで、ゲルシェになることができた。

チベットばかりでなく、モンゴル、ブータン、さらにはロシアのカルムイクなどの僧侶がラサへ修行に行き、ゲルシェになることができたのは、チベットの社会では、村人が僧侶に布施をしたり、施主の関係を持つ習慣があったためである。

シゴンの僧侶の日常生活費は、家族の援助が主であり、家族が僧房を建てたり、年間の食材であるツェンパ（裸麦の炒粉）、バター、肉などを提供してくれる。また、他の村人も寺僧が祈祷に行くたびに布施をする。村人は葬儀、正月の時、カネや食料で布施する。村に祈祷僧として行った場合の布施は意外に高額で、年間1,2千元（約3万円）の生活費をもらうことがある。

IV. 村と寺の関係

伝統的なチベット人社会では、寺院は経済や文化、宗教、教育などの中心であった。当時、寺院と村の関係は、喜捨を受ける者と喜捨をする者との関係のほか、統治者と統治される者との関係があった。1949年の革命後、政府の「民主改革」や「改革開放」以後の宗教に対する中央政府の統制政策などによって寺院は村に対する政治的影響力を失った。しかし、宗教的或いは精神的な面では今日も強い影響を与えている。

シゴンやガルツェゴンバ、ヤマザシチなどはシュンボンシ上下部族の村人が経済的負担をして建設し、僧侶を招来したという経過があるため、正月、葬儀、重要な宗教の祭りの時、村人はシゴンやガルツェゴンバなどの僧侶に布施する義務がある。また僧侶は正月、葬儀の時、村人のために宗教儀礼を行う義務があるので、一般的に村と寺の関係は施主と喜捨を受ける者の関係である。以下の調査村の寺院の事例から寺院の社会福祉・教育・紛争解決する機能について紹介する。

（1）寺の福祉施設と生活保護

村人のうちで孤児や、体に障害があるため自立して生活ができない人は僧侶になり、村人から布施を受けて生活することができる。シゴンの少年僧侶Bの話では、数年前、両親が病気で亡くなった。孤児になった彼は親戚の勧めでシゴンの僧侶になった。寺が生活を保障したため、彼は現在、ゲルシェになるため、修行に努力しているとのことであった。

チュルマ村やシュンボンシ村の村人は、一般的に60歳になると、シゴンやガルツェゴンバに行き僧侶と一緒に生活し、経文を唱えて宗教的な活動を行っている。老人達は一般的に、親戚の僧侶と一緒に生活する。しかし、親戚の僧侶や世話をしてくれる人がいない老人は、寺が生活を保障する。

寺は村人のため、物質的な支援をしている。例えば、ヤマザシチは銀行から借金できない村人

に、春の耕作をする時の肥料購入、冬虫夏草を掘るための草原借用費などを融通する。そのため、10万円を資金として用意し、各戸に2千元を貸出す。利子は年間5%であり、保証人としてヤマザシチの僧侶一人と公務員一人をたてる必要がある。またヤマザシチの僧侶はシュンボンシ村の貧乏な家族に金を貸出す。他村の人も借りることができるが、シュンボンシ村の村人が優先する。

昔は、村人が借りた金を返す時、3、4倍の利子をつけて返してくれることもあった。また、その年に寺で宗教儀礼を行う時、金を借りた村人が食料、金で布施することもよくあった。そのため、金の貸出しは僧侶達の生業の一部分にもなっている。しかし、最近、市場経済の浸透とともに、村の若者が寺から金を借りて賭博や飲酒などに使って踏み倒すことが増加している。そのため寺は近年から村人の若者に金を貸す時は、必ず妻や両親の一人が保証人になることを条件とする新しい規則を作った。

(2) 教育機構

寺院は伝統的なチベット人社会にあつては、教育機構であり、僧侶は知識人である。村人から見ると、僧侶とりわけ活仏は精神的な指導者である。チベット全地域には精神的な指導者がいるが、各寺院の活仏はその地域の村人の精神的な指導者である。

ガルツェ郷とシュンボンシ郷の人々の精神的な指導者であるガルツェ・ラマ (Mgar rtsai la ma) は、2010年の5月にガルツェゴンパで村人に対して説教を行った。その時、信者が隣の県や州からも約10万人という驚くべき数の信者が集まった。彼は仏教の教理をやさしく説き、人間としてあるべき道徳、善行、たとえば孝行、弱者の救済、どろぼうをしないことなどを信者に実行するよう求めた。

チベットの村人は近代的な学校教育を受けてないものであっても、基本的な道徳意識が高い感じを受ける。高僧の説教をまじめに聞く習慣があるからである。

また伝統的なチベット服は襟や袖口を虎、キツネなどの毛皮で飾っていたが、高名な活仏が講演で、チベットの服を作るため大量の動物が犠牲になっていることを説教した後、チベット全地域では動物の毛皮でチベット服を飾る習慣が一切なくなった。シュンボンシ村とチュルマ村でも、チベット服を本物の動物の毛皮で飾っているのをほとんど見ない。

シュンボンシ村とチュルマ村の村人は毎月、村で宗教の儀礼を行っているため、村の若者は寺で僧侶と宗教儀礼、或いは仏教の理論的な知識を学習する。近年、チベット文化見直しの風潮が広まるとともに、中学生、高校生、大学生、さらに大学院生のなかにも寺院のゲルシェに伝統的な文化、習慣を学ぶものが増えている。

(3) 地域の紛争を解決する機能

チベット地域では、昔から各地域や各部族、或いは各村落の間で放牧地をめぐる紛争があり、命を落とすものも多かった。紛争を解決し調停するのは、主として各地域の有名な活仏あるいは長老会であった。彼らは習慣法に従って死傷者の家族あるいは本人に家畜やカネでトン(命価)を払い、紛争当事者に仲直りをさせ、平和を回復した。

調査村でも昔から周辺の村落や部族との間で草原の紛争が起きたとき、ガルツェゴンパのガルツェ・ラマを主として解決してきた。

1998年チュルマ村を含むシュンボンシ上部族と隣の循化県のカンザ部族の間で放牧地の境界をめぐる紛争が起き、双方に3人の犠牲者が出た。循化・同仁両県政府が解決に努力したが、なかなか紛争を調停することができなかった。ガルツェ・ラマや循化県のヤチャン・ラマの努力により、犠牲者の家族に命価を払い、互いの寺院に「大藏経」(bka'gyur bstan'gyur)の經典を差し上げることによって紛争を解決した。今日、互いは平和的な関係にある。

2002年シュンボンシ上部族のニャンジャ村とシュンボンシ村・ガルツェ郷の間で、放牧地紛争が起きた時、ガルツェゴンパのガルツェ・ラマを

はじめ、ガルツェゴンパ、シゴンなどが紛争を調停し、平和的に解決した。また2006年から放牧地を各戸に配分する際に、シュンボンシ村の村民の間に激しい論争が起きた。このときも寺が調停した。そして、今も紛争が続いている問題に対して、寺が平和的に解決するため努力している。

(4) 人口・戸数の調整機能

チュルマ村とシュンボンシ村は基本的に半農半牧である。この地域の畑は山地にあって灌漑ができない。放牧地もまた山奥にあるため、農牧業の収入があまりよくないのが現状である。郷政府の報告によるとチュルマ村とシュンボンシ村の村人の年間平均収入が約3,633元であり、村人の65%～70%は貧困な生活を送っている。〔「シュンボンシ郷政府2013年扶助貧困報告書」〕

人口が増加し、戸数が増えると生存を維持することが難しくなる。それゆえ、村の家族数が多くならざるを得ない。このことは分家すれば社会が引き受けるべき経済困難を家族が負担することを意味する。

ところがチベット人地域では、畑と家畜が少ない多人数家族は子供を出家させることでこの困難を解決しようとする。いったん出家すれば、村人は出身家庭の経済状況により違いが生ずるとはいえ、僧侶の生活を支える。こうしてその家族の負担を村人が広く分担する仕組みである。若者の一定人口が僧侶になれば（僧侶は基本的に恋愛・結婚が禁止されているため）人口増加を抑制することができる。チベットの寺には人口調整の機能があるのである。

その一方で、寺院は伝統的な習慣やしきたり、さらには旧式の学習方法を固く守るという、保守的な傾向が強いため、経済、科学技術、医療衛生の向上に障害となったのも事実である。僧侶が釈迦以来の教えを固く守り、一般的に日常的な生産活動に参加しないため、家族や村社会の経済的な負担を大きくしている。この戒律は現在少しずつやぶられ、農繁期などには寺僧の帰郷を許す寺院もある。

さらに牧畜業は重要な経済支柱でありながら、各地方の精神的な指導者である活仏が村人に対して家畜の売買や屠殺を悪事であると説くことがあって、村社会の経済発展の障害になったこともある。

V. 村の宗教組織

チベットの村社会では、毎月さまざまな宗教儀礼を行っている。農作物の豊作や家畜の増加、村人の健康などを祈るためである。基本的にチベット仏教ゲルク派を信仰し、各村では村人の15歳から65歳までの男子全員が毎月あるいは毎年村の宗教儀礼に参加する義務がある。ニンマ派などの特別な宗教組織がある村であれば、村の年間や毎月の宗教儀礼はその宗教組織が行う。各村の宗教組織形態は村によって異なるので、以下で、調査村であるチュルマ村とシュンボンシ村の宗教行事と組織を取上げる。

チュルマ村では、村人の15歳から65歳の男が毎月の29日に、マニカンで経文を唱え儀礼を行う。村の宗教組織にも寺の組織のように、チュウパ、ゲルケがいる。村のチュウパは老人のうち、宗教の儀礼に精通した人になる。ゲルケは一般に中年の人であり、儀礼を行う時、戒律などを監督し、儀礼を欠席した人に一日、5元（約80円）の罰金を課す。

一方、シュンボンシ村の宗教儀礼はチュルマ村とかなり異なる。シュンボンシ村では、ガウバ（sngags paニンマ派の僧侶）、アチョウジャウ（amchod rgyal bo世俗僧）、アチョウジョウモ（amchod jo mo世俗尼僧）という三つの宗教組織がある。ガウバは、シュンボンシ村には43人いる。毎月（旧暦）10日にガウカン（ニンマ派の儀礼を行う場所）で儀礼を行っている。ガウバにも寺の組織のようにチュウパ、ゲルケ、監理員などがある。

ニンマ派は「古派」の意味であり、現在にいたるまで約1300年の歴史がある。シュンボンシ村のニンマ派の僧侶の組織は12世紀に設立され、今に

いたるまで、900年の歴史があり、設立当時の正統な宗教儀礼を保持しているといわれる。ニンマ派では僧侶は結婚が許されるので、シュンボンシ村のニンマ派の僧達は、農牧業にしながら、宗教儀礼を行っている。ニンマ派の僧は一般的に世襲する。父親がニンマ派の僧であれば、子供の一人はニンマ派の僧になるのが原則だが、家族の事情によって、なくてもよいこともある。また、ニンマ派を信仰する村人は誰でもこの組織に参加することができる。この組織の義務は全村の重要な宗教儀礼を主催することや、村で死者が出た時、葬儀を行うことである。

アチョウジャウすなわち世俗僧はシュンボンシ村には、約60人いる。このうち、教師や公務員の仕事を定年退職後、世俗僧になった人も何人かいる。ここでもチュウバ、ゲルケなどが設置され、民間の宗教組織の形式で村人のために儀礼を行っている。ニンマ派の僧は世俗僧をニンマ派の新しい宗派と呼んでいる。世俗僧の組織はシュンボンシ村では、約200年の歴史しかないため、ニンマ派の僧侶のように正統的な宗教儀礼を持ってない。儀礼を行う時の正装もチベットの一般的な平民の服であり、僧衣がない。

世俗僧は毎月（旧暦）の10日、ニンマ派の経文を唱え、儀礼を行っている。また村で死者が出た時、故人の家族によってよばれたとき、祈祷僧として故人の冥福を祈る。村人であれば、誰でも世俗僧の組織に参加することができる。

アチョウジョウモすなわち世俗尼僧はシュンボンシ村では、約20人いる。学ぶべき経文から見ればニンマ派に属するため、村人は世俗僧と同様、ニンマ派の新しい宗派と呼んでいる。アチョウジョウモが、現在シュンボンシ村では唯一自分の経堂（'dau khang）を持っていない宗教組織である。しかし、昔、村の正面側にある丘にアチョウジョウモの殿堂と僧房があった。そこで、200年ほどの間、村人のため儀礼を行って来たが、1958年の叛乱、文化大革命など社会の大変化の中で壊された。それ故、現在、アチョウジョウモは村のマニカンを借りて、毎月（旧暦）の10日に村人の

ため儀礼を行っている。

チベットの村では、死者が出た時、村の女をはじめ、男の老人達も故人のため、斎戒して祈るのが一般である。シュンボンシ村では死者が出た時、葬儀はゲルク派・ニンマ派の僧侶、世俗僧に依頼するが、全村の女達の斎戒つまり「きよめ」の儀礼は世俗尼僧が主催している。

宗教的な活動や儀礼を行うことは、チュルマ村とシュンボンシ村の村人にとって、日常生活の中で、重要な部分を占める。村人は農産物の豊かな収穫、家畜の増加、家族の幸福、及び来世の靈魂の生まれ変わりのために、毎日、マニカンの大きなマニ車を交替で回し、経文を唱え、仏塔を回るなどの儀礼を行っている。宗教組織と儀礼は村人にとって重要な存在である。

VI. 寺院と村の宗教儀礼

(1) シゴンの儀礼

チベットの寺院では、様々な年間儀礼を行う。シゴンでも毎年25人の僧侶がダウカンとゴンカンで年間儀礼を行っている。基本的に一般の儀礼はダウカンで行っており、寺の僧侶全員が必ず参加する義務がある。密教の儀礼はゴンカンで行い、寺が決めた僧侶しか参加することができない。例えば、大日如来の儀礼、ドルジェジクチュの儀礼などである。以下、シゴンの年間儀礼を表1で示した。

(2) チュルマ村の年間儀礼

チュルマ村の村人も様々な年間儀礼をおこなっている。例えば、1月5日（旧暦）村人の15歳から65歳の男が村のマニカンに集まり、午前9時頃から午後の5時まで仏頂尊勝法の経典を唱え、新しい年に村人に災難や家畜に被害がなく、農産物が豊作になるよう、新年の祈祷会を行う。儀礼に欠席すれば、5元（約80円）の罰金を課す。この日、年間儀礼を主催する人を決める。一般に6人を連番で毎年の年間儀礼の費用、食事を提供する家族を決める。

表1 シゴンの儀礼

月	期 間	儀 礼
(旧暦) 1月	10日から15日まで	新年の祈祷会を行う。
2月		特別な儀礼がなく、村に祈祷僧に行く程度である。
3月	7日から16日まで	大日如来の儀礼を行う。
4月	① 14日から16日まで ② 23日から29日まで	① 斎戒する。 ② ドルジェジクチェの儀礼を行う。
5月		特別な儀礼はない。
6月	① 4日から13日まで ② 15日から ③ 17日から22日まで	① 夏の祈祷会を行う。 ② 夏安居(ヤツニ)が始まる。 ③ 大日如来の儀礼を行う。
7月	① 1日から6日まで ② 8日から10日まで	① 弥勒菩薩の千供儀礼を行う。 ② 釈尊の儀礼を行う。
8月	① 1日から ② 17日から19日まで	① 夏安居が終わる。 ② 8月の祭祀を行う。
9月	21日から25日まで	大日如来の儀礼を行う。
10月	25日から29日まで	ツォンカバの記念祈祷会を行う。
11月	冬至	祈祷会を行う。
12月	① 1日 ② 15日から元日まで	① 大日如来の儀礼を行う。 ② 論蔵供養の儀礼を行う。

儀礼に参加した村人の食事は決めてある5軒の家から提供する。一般的に5軒家族は一つのグループになり、輪番で儀礼の参加者に食事を提供する役割を担っている。

1月18日から23日まで村人の15歳から65歳男(村人であれば公務員、教師、学生なども儀礼に参加する義務がある)がマニカンで仏頂尊勝真言を1万回念誦する。村は男全員で75人、6日間の儀礼で真言を1万回念誦する義務がある。しかし、欠席した人の分は参加者が分担するので、時々一人の分担する念誦数が増える場合もある。

3月7日は村の精神的な指導者であるラッコドゥジェチャン活仏の記念祈祷会を行う。この日、20歳以上の村人(女を含め)は斎戒する。斎戒期間は二日間であり、最初の日の昼飯しか食べず、朝と晩に茶だけ飲み、観音菩薩の賛辞を唱えて斎戒の準備をする。

チベット人は身、口、意三つから斎戒するので、二日目は御飯も食べないし、口を閉じ話してはいけない。肉体労働も禁止されているため、この時期、耕起・播種などの仕事で忙しい村人は斎戒しない場合もある。斎戒した村人は心を落ち着け仏

塔を回り、真言を念誦して衆生の幸福を祈る。3日目の朝4時ごろ、観音菩薩の賛辞を唱え、最後の祈祷をして斎戒を終る。

4月15日は釈尊が誕生、悟り、涅槃に入った日であるため、村人は斎戒して、衆生の幸福を祈る。仕事の都合で斎戒しない人もいるが、基本的に20歳以上の村人は斎戒している。

5月13日、午前の9時頃村の15歳から65歳の男が村の西北西にある山に集まり、山神の儀礼を行う。一人ずつ裸麦の炒り粉(ツァンパ)、松の枝、コノテガシワの枝などを持って来る。松の枝やコノテガシワの枝に火を点け、その上に裸麦の粉、チベットのパンなどを置く。山神の賛辞経典を唱えて昼の12半頃まで山で儀礼を行う。

チベットの民間信仰では、神は世間的な神と出世間的な神(世間や出世間的な神について次章で詳述する)の二つに分けられる。この世間的な神は山神(チベット原始宗教ボン教の神であるという説がある)であり、この世で安全、幸福、金運などを与えるが、来世の生まれ変わりや悟り、極楽に行くことについては助けることができない。出世間的な神は釈尊、観音菩薩など仏教の神であり、彼らに祈ると六道輪廻からの解脱や悟りに至ることができるという説がある。また、世間的な神が物の匂いを食べる(食匂い者)という説があるので、村人は松の木の枝に火を点け、その上にツァンパ(裸麦の粉)、チベットのパン、布、茶など供え物を置き、その煙で守り神に供奉する。

この日の午後から17日まで、村の男全員がマニカンに集まり、タムディン(馬頭菩薩)の経典を唱え、儀礼を行う。村人の宗教儀礼は寺の儀礼と比べると簡単であり、どんな儀礼でも、経典を唱えるだけである。寺には、儀礼を主催するゲルシェ(博士)があり、これが経典に基づいて儀礼を本格的に行う。もちろん寺の教育システムのクラスでも、儀礼の意義、やり方、動機などを教えている。

6月3日にはシュンボンシ上部族の山神の祭り儀礼を行う。シュンボンシ上部族の七つ村の15歳から65歳の男全員がガンケルガン(sgang dkar

sgang,「白山」の意味)に集まり、守り神の賛辞経典を唱えて昼の12時半まで儀礼を行う。白山はチュルマ村から8キロ離れ、高さが約4200メートルの山である。この儀礼は毎年、七つの村が輪番で主催する。主催村は儀礼用のツァンパ、松の木の枝、酒など供物を準備する義務がある上、チュマル村など七つの村の男全員のために酒も準備する。儀礼が終わり七つの村の男全員が一緒に酒を飲み、歌を歌って村と村、仲間と仲間の仲を良くする機会にもなっている。

7月は裸麦・春小麦の収穫も終わり、草原に花が咲くもっともよい季節である。7月11日には村の西南の方にある山神の儀礼を行う。山下には草原や畑があり、この日の午前村の男全員が山で儀礼を行い、女や子供達が草原でテントを張り、料理を作って男達を待つ。この日の午後から13日まで三日間草原で家族と一緒に過ごす。

9月22日は仏教の重要な祝日であるため、村人は齋戒する。しかし、仕事の事情によって齋戒し

ない人もいる。一般的に年長者は皆齋戒する。

10月25日はチベットの仏教学者・仏教の改革者ツォンカパが涅槃に入った記念日であるため、チベット全地域では齋戒など儀礼を行って家族の幸福など祈る。チュルマ村でも、村人は齋戒して六道輪廻から解脱することを祈る。

11月13日から17日まで村の男全員がマニカンでサンドンマ(Saing gdaong ma)の賛辞経典を唱え、年末の儀礼を行う。

12月15日午前、マニカンと各戸の仏壇に新しい経典や仏像を供奉し、午後には村の10代の子供達が経典を背負い、村を三回回って来年の村人の幸福を祈る。

チュルマ村の年間儀礼は以下の表2で示した。このほか毎月の29日に仏頂尊勝の儀礼を行っている。

(3) ガウバ(sngags paニンマ派の僧)の儀礼

シュンボンシ村の43人のガウバすなわちニンマ派の僧侶もまた、毎年、ニンマ派のガウカン(sngags khang)で儀礼を行っている。一般的にガウバの家庭では儀礼の意味、目的など教えているため、年間儀礼には誰でも参加することができる。1月27日から29日まで忿怒文殊菩薩の儀礼を行い、儀礼のチャム('cham儀礼の踊り)を踊る。この時、人の修行のレベルによって踊る役も違う。

以下の表3でガウバの年間儀礼を示した。これ

表2 チュルマの年間儀礼

月	期 間	儀 礼
1月	① 5日 ② 18日から23日まで	① 仏頂尊勝法の儀礼を行う。 ② 仏頂尊勝真言を1万回唱える。
2月	8日から10日まで	昔は大悲観音の儀礼を行った。しかし、社会の変動の中で中止し、今は回復していない。
3月	7日	この村の精神的な指導者であったラコドゥジェチャン活仏の記念祈祷会を行う。
4月	13日から15日まで	齋戒を行う
5月	① 13日の午前 ② 13日の午後から17日まで	① 山の神を供奉する儀礼を行う。 ② タムディンの儀礼を行う。
6月	① 3日 ② 4日から13日まで	① 山の神を供奉する儀礼を行う。 ② シゴンとゲイセイワで夏の祈祷会を行うため、この時期、村人は僧侶に食料や金の布施をする。
7月	11日	山の神様を供奉する儀礼を行う。
8月		農業の収穫時期であるため、特別な宗教儀礼がない。
9月	22日	齋戒を行う。
10月	25日	齋戒などをして、ツォンカパの記念祈祷会を行う。
11月	13日から17日まで	サンドンマの儀礼を行う。
12月	① 15日午前 ② 15日午後	① 村のマニカンと各戸の仏壇に新しい経典や仏像を供奉する。 ② 村の子供達が経典を背負い、村を三回回って、来年の村人の幸福を祈る。

表3 ガウバ(ニンマ派の僧)の儀礼

月	期 間	儀 礼
1月	① 15日 ② 27日から29日	① ドルジェジクチュと文殊の儀礼を行う。 ② 忿怒文殊の儀礼を行う。
2月	11日から15日	カァジェハエチンズバの儀礼(密教の修行儀礼)を行う。
4月	1日から4日まで	大悲観音の儀礼を行う。
6月	① 3日から5日まで ② 13日から15日まで	① 無量寿如来の儀礼を行う。 ② バドマサンバヴァの儀礼を行う。
9月	① 22日から23日まで ② 27日から29日まで	① カルランシチョウの儀礼(密教の修行儀礼)を行う。 ② ゴンボツェダ(村の守り神様)の儀礼を行う。
11月	27日から30日まで	サンドンマの儀礼を行う。

以外にも、毎月10日に修行の三根本の儀礼を行っている。そして、15日にと文殊の儀礼を行っている。

(4) アチョウジャウ（世俗僧）の儀礼

シュンボンシ村のアチョウジャウ（世俗僧）60人は、教師や公務員などの仕事から定年退職した人、また学校や寺院で勉強したことがない人から成っている。それ故、本格的に儀礼のことも習ったことがないので、民間信仰のように毎月10日に仏頂尊勝の真言を唱える儀礼を行っている。それ以外には、以下の表4で示す儀礼を行うだけである。

表4 アチョウジャウ (a mchod rgyal bo 世俗僧) の儀礼

月	期 間	儀 礼
4 月	16日	大悲観音の儀礼を行い、新しいタル・チュー（経文刷りの布の旗）を飾る。
5 月	4 日	バドマサンバヴァのトンチョウ ⁵ (staong mchaod 千供儀礼) を行う。
6 月	13日から15日まで	寺から僧侶を誘い、土の神様の儀礼を行う。
10月	25日	バドマサンバヴァのトンチョウ (千供儀礼) を行う。

(5) アチョウジョウモ (a mchod jo mo 世俗尼僧) の年間儀礼

アチョウジョウモ（世俗尼僧）20人いる。彼女らは一般の村人であり、日常は農業や牧畜の仕事で忙しく、学校に通ったことがないため、經典の意味、儀礼の目的などあまり理解できず、民間信仰のように毎月10日に持明の儀礼を行っている。そして、25日にカツジュウ (Mkha' 'grao ma 空行母) の儀礼を行っている。また、毎年5月3日から5日まで年間儀礼として無量寿如来の儀礼を行っている。

表を通しておおまかにわかるのは、寺院とガウバ（ニンマ派の僧侶）が厳格に定められた儀礼によって行事を行い、村人は真言を唱え、山の神及び土の神を供奉するなど民間信仰の儀礼を行って

いることである。

寺院やガウバと村人の行う年間儀礼が違っているのは、彼らの目的が様々なためである。例えば、僧侶とガウバは修行のため、大日如来及び大威徳を讃える儀礼を行っている。村人は、家族の幸福、家畜の増加、毎年の農産物の豊作のため、山の神及び土の神に供奉の儀礼を行っている。寺院の僧侶、ガウバ及び村人は宗教の正統的な儀礼や民間信仰の儀礼を行っているため、彼らの儀礼の継承方法にも異なる点がある。例えば、寺院では正統的な儀礼を行っているため、先生から学生に儀礼のやり方、經典の意味などを正確に教え、学生の仏教の知識や修行のレベルがある程度に達しないと、儀礼に参加することができない。ガウバは、密教の儀礼を行っている。また、ガウバは家庭を持っているため、儀礼のやり方は一般的に親から子に教え伝えられている。あるガウバは寺院の僧侶のように、親から子に儀礼のやり方及び經典の意味を教え、子の修行のレベルがある程度に達しないと、密教の儀礼を行うことは危険であると話してくれた。

だから村の重要な儀礼は僧侶やガウバが主催し村人に任せることはない。村人の行う行事には、チベットの文字を読むことができる人であれば、誰でも儀礼に参加し、年長者と一緒に經典や真言を唱えることができる。

VII. 村人の神に対する認識

ここで、村人の儀礼のうち、典型的に世間的な神の宗教儀礼と寺院の出世間的な神の宗教儀礼を分析し、調査村の村人の神に対する認識や宗教儀礼を紹介したい。

上述したように、チベットの民間信仰では、世間的な神と出世間的な神という二つに分けている。村社会では、二つの神の象徴的な存在する形も異なっている。

例えば、世間的な神は山神であり、高い山に存在することから、村人はその山の頂上にタル・チョーやラーツェ（長さは3, 4メートルがあり、

石組みの上に矢の形の真直ぐな棒を多数刺したものを立てる。それは山に村の守り神が存在する象徴である。また、各村には山神が乗り移ることができるというシャーマンがいる。シャーマンをチベット語でラツワという。山神は元々仏教以前のボン教の神であると言う説もあるから、これに従えばラツワはボン教の神が乗移ることになる。

出世間的な神は仏や菩薩であり、それは仏像やマンダラの形で寺院の仏殿などに存在する象徴である。

世間的な神が山に存在するという認識しているため、村人は正月や夏の決まっている日に守り神が存在する山に登り、新しいタル・チョーや矢の棒を立て、守り神の賛辞経文を唱えて儀礼を行う。儀礼終了後に村人の男達が太鼓を叩くと共に、山神がシャーマンに乗り移って神の踊りを踊る。シャーマンが先頭に立って村人の男達はその後ろに従って、神の踊りながら、山の頂上から村に帰る。村のマニカンでは、年長者の三人が村の代表としてシャーマンに乗り移っている山神にカータ⁶を挙げ、一年間の村の農作の豊富や家畜の増加、村人の健康や安全などを守ることを頼む。各家族もそれぞれ山神に対して各家族の安全などを祈祷する。

村人の男達が出稼ぎや遠いところに行く場合、山神に個人の安全や金運などを祈る。また、村人の家畜などを盗難や行方不明になった場合は、シャーマンを家に招いて松の木の枝に火を点け、その上にツェンパ（裸麦の粉）、チベットのパン、布、茶など供え物を置き、その煙で守り神に供奉して賛辞経文を唱えると、山神がシャーマンに乗り移って来る。それで、村人は神に家畜の盗難や行方不明のことを尋ねる。

それゆえ、村社会では世間的な神が村の近くの山に存在し、シャーマンを通してしばしば直接接触することができる。

つまり、世間的な神は文字通り、この世に生きている時期の個人の安全や家畜の増加、家族の健康などを守ってくれる神である。特に、村社会では村の間で紛争を起きた際、山神が村人の安全を

守ってくれるという信念が強い。それで、村社会では日常的に山神の儀礼を行っているが、参加者は15歳か55歳までの男に限られる。彼らが家族の生活のため、出稼ぎや家畜の放牧などで留守をすることや、出稼ぎの収入の金運や家畜の増加や、行方不明などは家族の生活と緊密な関係していることが理由である。さらに、集落間の紛争時に先頭に参加するのは15歳から55歳までの男だからなのである。

出世間的な神は仏教の釈迦や菩薩などであり、仏の仏像やマンダラを寺院に飾っていることが多いので、寺院は出世間的な神が存在する場所である。神に対して宗教儀礼を行う場所でもある。また、各家にはチョウカン（mchaod khang 仏間）という部屋がある。その部屋に仏壇と神棚が設置し、釈迦や観音など出世間的な神の仏像やマンダラが飾っている。

いうまでもなく基本的に出世間的な神に対する宗教儀礼の担当者は僧侶である。それ故、村人の年間儀礼や葬式における出世間的な神に対して宗教儀礼を行う時は僧侶を家へ招く。

村人が出世間の神に対する宗教儀礼は基本的に二つの段階に分けられる。

一つは年初、村人が寺院の活仏に一年の家族の幸福や健康、或いは悪運を取り除くため、どんな宗教儀礼を行うかを尋ねる。活仏がおっしゃったとおり、村人は僧侶を家に招いて宗教儀礼を行う。

もう一つは、葬式の時であり、死者が出た際には家族が活仏や僧侶（一般的に僧侶5人である）を招き、ボワ（死の直前や直後にある意識を転移させる行で、靈魂を早めに屍体から解脱させて極楽へ導くこと）や「解脱経」などを念誦して葬送儀礼を行っている（次章の村人の通過儀礼で詳述する）。

以下で世間的な神や出世間的な神の象徴的な存在や効能などを比較して表で取り上げる。

表5 世間的な神と出世間的な神の役割の比較

世間的な神（山神）					出世間的な神（釈迦如来、菩薩など）			
象徴的な存在する場所と形	宗教儀礼の主催者	村人と接触する形	効能	出来ないこと	象徴的な存在する場所と形	宗教儀礼の主催者	村人と接触すること	効能
村周辺の山、山頂上のラーツェ	村人の男（15-55歳）	シャーマンを通して、直接願いを頼むことができる	この世の財産や安全などを守ること	よりよく生まれ変わることや極楽に行くなど	寺院 仏壇 仏像やマンダラなどの形	僧侶	僧侶の宗教儀礼を通して村人の願いを神に届ける。	魂をよりよく生まれ変わることや極楽へ行くなど

村社会では、世間的な神は、村のシャーマンに乗り移って、村人と直接に接触することができる。神が常に村人の財産や安全を守ってくれていると村人は感じている。また、村周辺の山に存在すると信じているから、村人にとって世間的な神は身近にいる存在である。

出世間的な神は、寺院の仏像やマンダラなどの形で存在し、宗教儀礼は僧侶を通して行われる。靈魂の生まれ変わることも人間の目で見えないことから、出世間的な神は村人にとって精神的な存在である。

Ⅷ. 村人の通過儀礼

チベット高原は広大にして交通不便であったため、同じ部族でも、地域によって通過儀礼はさまざまである。ここでは調査地のチュルマ村の村人の通過儀礼を紹介したいと思う。

(1) 誕生日（ツェトン btsas staon）

子供が生まれて1ヶ月の間に、家族が新生児を寺院に連れて行き、活仏に命名と長寿儀礼を行うように頼む。活仏は子供の母の年齢や八卦によって子供に名前をつけたり、お札（ふだ）を与えたり、それに子供を健康で順調に成長をするため、長寿儀礼を行う。一般的に仏教の神の名前を借りて子供に付ける。

例えば、男であれば、サンジェジャ（ブッダが守る）、ユウダン（本尊）、ネンラ（天神）、ドルジェ（金剛）などがある。女の子であれば、天女、観音菩薩の名前を付ける場合も多い。例えば、ラモウ（天女）、ジョウマ（観音菩薩）、ダワジュウマ（月

の観音菩薩）、ツェランジュウマ（長寿観音菩薩）などがある。

子供に名を付けた翌日、或いは一週間内に家族と親戚が主となって、生まれて一カ月を祝う。儀礼の日、皆の前で子供に最初の服を着せて、付けた名前を初めて呼ぶ。例えば、生まれた子供が男であれば、付けた名を右の耳から三回呼ぶ。女の子であれば、付けた名を左の耳から三回呼ぶ。民間信仰ではそれぞれ守り神が存在する。男の守り神は右の肩、女の守り神は左に存在すると信じているからである。その日、名前を三回呼ぶことによって、新生児の守り神を呼び目覚めさせて子供の健康や安全などを頼むのである。

また、儀礼の日、子供を初めて親戚の人々に見せる。1ヶ月の祝いのため寺院に連れてゆく前に新生児を家族以外の人に見せることや、外に連れ出すことはタブーである。村人が新生児の魂が安定せず、また、外には子供の魂に悪さをする鬼神がたくさん存在すると信じているからである。村社会では子供が四、五歳になるまで毎年寺院に連れて行って長寿を願う儀礼などを行い。病気などの際、治療のために儀礼を行う。ときには活仏や僧侶の示唆によって母親が子供を連れて巡礼に行く場合もある。

(2) 生まれて一周年の祝い（ブットン bau staon）

子供が生まれて一周年目の誕生日を祝う。その時、家族の経済力によって、村人に酒、お菓子、果物を御馳走する。子供が女の子であれば、家族はお菓子と果物だけで、酒は提供しない。また、この村では、毎年5月13日の山神に供奉の儀礼を

行う時、その年に男の子が生まれた家族は、山神に羊を一匹供え、女の子が生まれた家族は5斤(2.5キロ)のバターを供える。それは、生まれた子供の安全や健康などを願うためである。

何故、男の子と女の子が違うか。

それは、チベットの伝統的な文化の中で、男と女の象徴する文化的な象徴物が明確に違うことである。それを紹介する必要がある。

チベットの男女も他の民族のように、昔から男は、狩猟、戦闘、肉体的な労働を担って来た。女は、採集、家庭内の仕事を行って来た。特に、吐蕃王朝が崩壊してから近代にいたるまで、チベットの集落間では草原をめぐる紛争がよく起きた。また、草原にはユキヒョウやオオカミ、キツネなど家畜や人間に被害を与える動物が多くいるので、男であれば、必ず強靱でなければならない。

そこで、男の文化的な象徴物は右、赤(血の色)、酒、刀などである。村人に酒を御馳走するのは、酒は男の象徴物なのである。

5月13日、村の男達が村の山神に供奉する時、一匹羊を捧げるのは、生まれた男の子が将来成人して戦闘に参加し敵と戦う時、山の神がこの男の安全を守ってくれるようにとのことである。家族が象徴的に一匹の羊を山の神に捧げて宗教的な儀礼を行った後、村の男達が羊を殺して食べる。

一方、女の文化的な象徴物は、左、白色(チベットの文化で、白色は慈愛を象徴する)、黄色(黄金の色)などである。チベットの伝統的な文化の中では、女の子は福運を象徴しその守り神は左肩にいる。5月13日、山の神に供奉をする時、バターをささげるのは、バターの色と金の色は同じであるため、そしてチベットの文化ではバターは福運を象徴しているためである。

表6 チベット人における男女表象

男の文化的な象徴物	女の子の文化的な象徴物
羊(肉、血、強靱)	バター(黄金の色、福運)
酒(性格は凶猛)	果物(性格は優しい)

(3) 結婚式(ニェントン gnyen staon)

チュルマ村では、男性は自分と恋愛関係がある女性を家に連れて来て、両親に紹介する。両親が認めれば、女は男の家で一週間暮らす。男の最も近い親戚が仲人となり、この女性を女の自宅に送って、女の両親に婚約を求める。双方の家族が同意すれば、婚約をするが、結婚式は一年後に行う。それまでの一年間は試行期間であり、女が男の家で生活して双方の感情が順調に行き、試行期間の一年が終わると、両方の家族が結婚式について相談したうえ、寺院の活仏が決めた日に結婚式を行う。一般的に冬の正月に結婚式を行うことが多い。

結婚式の際、花嫁の父や兄弟を主とする親戚の男全員(一般的に15人から20人)が花嫁を花婿の家に送る。彼らは花婿の家で接待を受け、両方の親戚が歌を歌って祝う。その時、花嫁の父或いは兄弟のうちの一人が、チベットの伝説である仏教的世界創生やチベットの歴史、花嫁の家族の歴史などを独特の朗読調で話す。

一般的に村人は村で結婚式を行っているが、改革開放後は、公務員や教師の仕事をしている人は、村とホテルの両方で行っている場合が多い。

調査村では、結婚式と共に行う宗教儀礼もある。それは、両方の家族が結婚式を挙げることにについて相談ができた後、花婿の家族は活仏に頼んで結婚式を決める。活仏が花嫁と花婿の八卦によって結婚式の日を決めるとき、宗教儀礼を行うことを指示する。一般的に「ヤンゲー」(幸運を呼ぶ)という儀礼を行う。それは、花嫁は花婿の家に嫁に来ることによって、花婿の家に幸運や金運などを持って来ることを祈る儀礼である。結婚式が終わって一カ月に寺院の僧侶を家に招く、經典を唱え祈祷を行なう。

一方、花嫁の家族も寺院の活仏や僧侶に頼んで、ヤンゲーの儀礼を行う。それも娘が嫁に行ったことによって、家族の幸運や金運を持って行くことや失うことを防ぐためである。一般的に嫁に行き一週間以内に行う。それは娘が嫁に行った後、すぐヤンゲーの儀礼を行わないと、娘が幸運

や金運を遠いところに持って行って、ヤングーの儀礼でも幸運や金運を取り戻ることが難しいというからである。

(4) 八十歳の祝い (ジャトン gya staon)

村人の誰かが八十歳になったら、その家族は寺の僧侶にカネや食料を布施し、僧侶達はその老人のため、健康や長寿の祈祷をする。

また、村人に酒や肉で御馳走し、村人はその老人にカータを捧げ、叩頭してその老人の健康や長寿を祈りながら、自分もその老人のように長寿になることを願う。そして、村人は歌を歌って村人全員で祝いをする。

(5) 葬式

調査村の村人は葬式の際、宗教儀礼を行っている。それは、チベット仏教では死は消滅を意味せず、靈魂の生まれ変わりを強調しているからである。特に、調査村の村人が死後、極楽に行くことやよりよく生まれ変わりを望んでいるため、葬式の時、活仏や僧侶に宗教儀礼を行うことを頼んでいる。

Ⅶ章で記述したようにチュルマ村では死者が出た時、まず、寺院から活仏と僧侶を招く。活仏は死体の前で、ボワを念誦し、僧侶は解脱経を唱える。「解脱経」を読むのは、死者の過去の罪滅ぼしをし、靈魂が六道輪廻から解脱するためである。

村人は僧侶が死者の家で7日間「解脱経」を唱えれば、靈魂は早めに六道輪廻から解脱すると信じているので、経済力がある家は、死者のため僧侶に7日間「解脱経」を念誦させる。一般的には少なくとも2、3日間葬式が終えるまで僧侶に経文を唱えさせる。

一般的な家庭でも、家族が亡くなった後の49日間、寺院に親戚の僧侶がいればこれに経文を唱えさせ、家族も経文を念誦する。また、この期間、女性の服喪者は、髪をとかすのを差し控える。男性の場合は、顎鬚や口髭を剃ったり、整髪するのを差し控え、ことさら目立つように毛深くしたり、髪をぼさぼさに乱したままである。

49日を経過すると、靈魂は生まれ変わると考えられているので、村人も服喪から正常生活に戻る。しかし、一年間、歌や踊り、酒、祭礼への参加など娯楽活動に参加するのを差し控える。

1年後に一周忌の時、死者のために寺院の僧侶や村人にカネや食事で布施し、経文を唱える。もし、死者が両親であれば、連続3年間に寺院の僧侶に布施をして、死者のため祈祷をしてもらう。また、3年間、娯楽活動に参加しない人もいる。

Ⅸ. 終わりに

本論で分かるように、村人にとって重要なことは、生活のため労働をするほかは、真言を念誦したり、年間儀礼に参加したり、家で宗教儀礼を行って家族の幸福を祈ることである。チベット仏教と自然崇拜とそれらをめぐる宗教儀礼は彼らの生活の一部分になっている。また、寺院は村社会にとって福祉施設であり、教育と平和維持機能を持っている。

これは調査村を含むチベット高原の生活環境、とりわけ長期間にわたって政教合一の支配制度がつづいたことと緊密な関係があると考えられる。これを一般的にはチベットが飛びぬけた高地であることを取上げて秘境だからという。じつは、近代までラサの政教一致政府が鎖国政策を行ってきたことが、チベット人地域を秘境化したと見なければならない。その上、1949年の革命以来、文化大革命が終わるまで中国政府もチベットを秘境化してきた。

チベット高原の平均海拔は3500から4000メートルであり、年間通じて冷涼、寒冷な気候なので、農産物の種類も限られている。調査村を含むチベット人の重要な生業である牧畜は、極限の環境の中、草を哺乳動物に食わせそのことによって生活手段を得るという合理性を持っている。だが、家畜を襲うオオカミや飼草を食うナキウサギなど害獣が存在し、そのうえ天候がいったん悪化すれば家畜や人命に損害が生まれる。また、放牧地を確保するため、部族間、村落間に草原紛争が絶え

ず、多くの人が犠牲になってきた。

この生活の不安定性によって村人は世俗的な神である山神に対してさまざまな宗教儀礼を行い、財産である家畜や家族の健康や安全を見守るよう祈りを捧げるのである。現在でも家族の一員が草原紛争や出稼ぎに出かける場合、安全を祈祷する習慣が維持されている。

一方、仏教は7世紀にチベットへ伝来し、8世紀にチベットの国教に決定された。歴代チベットの統治階級は仏教を崇拝し、仏典の翻訳や寺院の建立などについて経済的に援助してきた。特に、13世紀モンゴル帝国フビライ帝がチベット仏教のサキャ派を支持したことにより、宗教的な領袖が政治的な領袖でもある政教合一の政治制度が成立した。

地方では曾て寺院は宗教、政治、文化、経済の中心であった。寺院の精神的な領袖である活仏はたてまえでは最高位の修行者であるが、転生概念が取り入れられるようになってからは地方の政治的な領袖、部族長などの親戚であることが多く、双方互いにおぎなって地方政権を形成した。

こうして、チベット仏教の宗教儀礼や文化などはチベット社会の各側面に浸透し、人々の日常生活や価値観をしいするようになった。

上述したように、調査村や寺院にはニンマ派やゲルク派など正式なチベット仏教の宗派があり、彼らがそれぞれの宗派の儀礼を行っている。同時にそこにはアチョウジャウ、アチョウジョウモなど村人の伝統的な宗教組織があり、仏教信仰と並んで山神及び土地の神への信仰と儀礼がある。それで、村人は神を基本的に世間的な神と出世間的な神に分類していることである。

ゲルク派やニンマ派の僧侶は修行のため、密教など厳格な儀礼を行い、その教育制度がある。特に、寺院には近代的な教育機構のように、学級、クラス、ゲルシェの学位（博士）などを設置している。学識の深い僧侶（ゲルシェ）はことさら村人の尊崇の的である。同時に俗人である村人にとって宗教儀礼は深い意味を持っている。儀礼は村人の生老病死、或いは通過儀礼と深く関わり、

その精神的物質的生活の不可欠の一部になっている。1949年の革命以来行政と信仰が分離され、鄧小平の農政が滲透すると経済の市場化が進み、出稼ぎが多くなり、自動車が村内に入ってきた。とはいえ、今日でも村社会では寺院は依然として欠くことのできない精神的物質的支柱である。

【注】

- 1 マニカンとは、各村の宗教儀礼を行う場所である。今日、村人の会議や村長などを選挙する場所にもなっている。一般的にマニカンの建物は寺院の殿堂の形であり、中には仏像や曼荼羅なども飾っている。
- 2 本論のチベット語のローマ字表記は、Wylie (1959) によるチベット文字の転写方式に基づくものである。
- 3 世俗僧とは、調査村であるシュンボンシ村にはアチョウジャウという宗教集団があり、彼らが農牧業に従いながら、チベット仏教のニンマ派の經典に従って宗教儀礼を行っている。村のニンマ派の僧侶が彼らをニンマ派の新宗派と呼んでいる。
- 4 ラブラン大僧院は、甘肅省夏河県にあり、チベット全地域の六大寺院の一つである。
- 5 トンチョウ（千供儀礼）とは、バターランプなど供える物の数が千個であることや、バドマサンバヴァの賛辭經を千回に唱えることなどすべての数は千個を備えることから、トンチョウ（千供儀礼）という。
- 6 カータはチベット族や一部のモンゴル族が祝賀や尊敬のしるしとして人に贈る。白、黄、藍などの帯状の絹布の物である。

【参考文献】

チベット語文献

- 「双朋西上部族史」編纂委員会2012年『双朋西上部族史』甘肅民族出版社
 宏奇尼達主編 2010年『熱貢族譜』民族出版社
 群培2009年『瓜什則族源史』甘肅民族出版社

- 万瑪航青2007年 『青海同仁県双朋西村落史』 甘肅民族出版社
索南堅贊 1997年 『チベット王統記』 青海民族出版社

中国語文献

- 「黄南チベット自治州概況」編纂委員会2008年 『黄南藏族自治州概況』 民族出版社
「同仁県誌」編纂委員会2001年 『同仁県誌』 三秦出版社
同仁県双朋西郷政府文献 2013年「双朋西郷政府2013年扶助貧困の報告書」
陳光国1997年 『青海藏族史』 青海民族出版社
孫懷陽 程賢敏 主編1999年 『中国藏族人口与社会』 中国藏学出版社
甘肅省夏河県誌編纂委員会 1999年 『夏河県誌』 甘肅文化出版社